

49. 《歌川広重「名所江戸百景」の新解釈》

歌川広重(注1)は、70歳近い1856年(安政3)から、1858年(安政5)にかけて、「名所江戸百景」を制作します。この百景の中に、ゴッホが模写した傑作の一枚があります。それが、1857年(安政4)に制作された「大はしあたけの夕立」です。絵の設定が、なぜ夕方の雨なのか、なぜ大はし(新大橋)なのか、推論しましょう。

1853年7月8日、ペリーが浦賀に姿を見せて以降、なぜか天変地異が続きます。

まずは、1854年(安政元)12月23日に、安政東海地震(マグニチュード8.4)が発生し(注2)、その36時間後に安政南海地震(マグニチュード8.4)が起こります。

そして1855年(安政2)11月11日には、安政江戸地震(マグニチュード6.9)の直下型地震が江戸を直撃。下町を中心に死者4300人、倒壊家屋1万戸以上に上りました。

さらに1856年(安政3)9月23日夜、台風と思われる大雨と高潮に見舞われ、永代橋が落橋します。それを記した瓦版が、「江戸大雨風大津浪出火(1856年(安政3))」です。

「名所江戸百景」の制作時と、天変地異の発生時期、ペリー来航を重ねると、先行き不透明な世相の中に合って庶民を元気付けるため、老骨に鞭打ち、復興や天下泰平の願いを込めて描いたと考えます。

さて「大はしあたけの夕立」の、「大はし」とは大川橋、「あたけ」とは「安宅」と書き幕府の船蔵(注3)です。夕方の雨の降り始めを描くことで、前年に発生した夜の風水害を思い起こさせ、背景に白い3つの三角形で安宅の船蔵を描き、助け船による救難救助活動を連想させています。そして、無事だった新大橋(注4)を描くことで、永代橋の早期復旧を願う構図になっていると考えます。

ちなみに安政4年7月に製作許可が下りた「高輪うしまち」では、背景の海面に台場が3基描かれており、急ピッチで建設されたことが分かります。描いたのは、平和の願いを込めたからでしょうか。

注1：歌川広重（生没年：1797－1858年）は、36歳の時、1833年（天保4）に「東海道五十三次」を制作しています。同時期の1831年（天保2）から1835年（天保6）にかけて、葛飾北斎は、「富嶽三十六景」を制作しています。

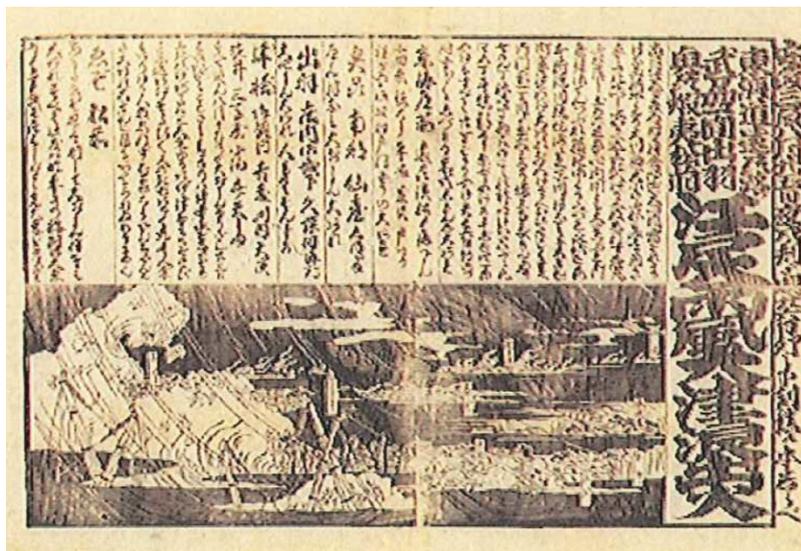
注2：このとき、アメリカに続けとロシアが開国を求め下田に来ていました。乗船してきた船が、津波に巻き込まれて大破。日本の船大工が修理し、無事、日露和親条約を携えて帰国できました。

注3：「安宅」は、江戸時代初期に建造された大型船安宅丸に由来します。大型船の建造は、鎖国により国内航路に専念する段階（1635年武家諸法度第17条）で中止されましたが、安宅丸の船蔵だったところが幕府の船蔵として活かされ地名になりました。現在は江東区新大橋一丁目。

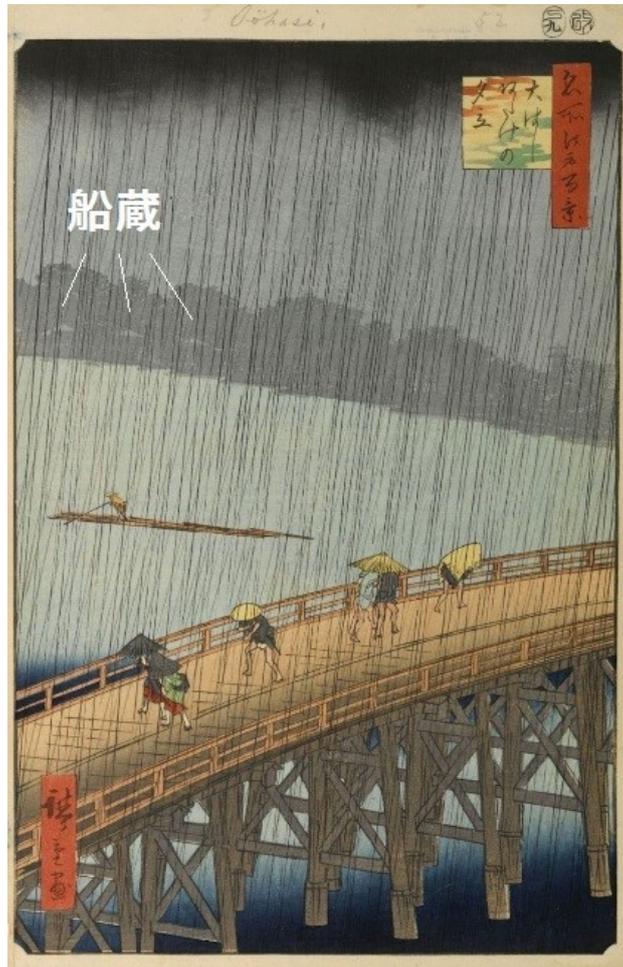
注4：新大橋は、隅田川に架かる橋で、両国橋と永代橋の中間にあった橋です。

写真は、①江戸大雨風大津浪災（東京大学大学院情報学環アーカイブ）、②名所江戸百景「大はしのあたけの夕立」（大はし＝新大橋のこと、細見が加筆）、③新大橋の位置（Yahoo 航空写真に細見が記入）、④名所江戸百景「高輪うしまち」（細見が加筆）

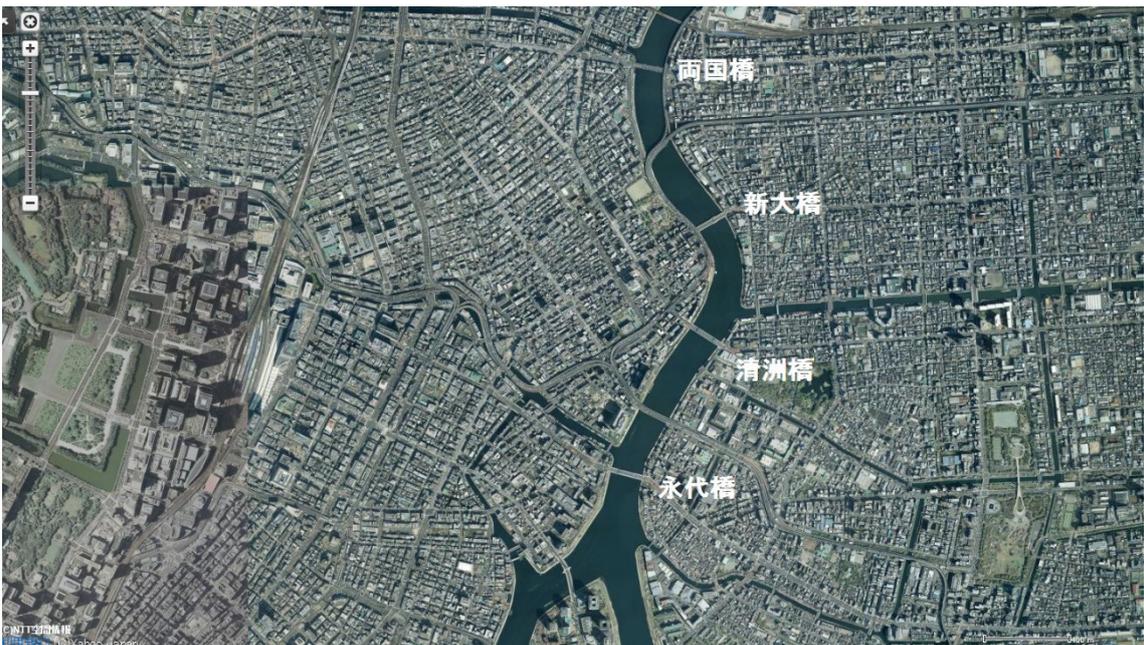
①



②



③



④

